

創刊の辞

『立教映像身体学研究』を創刊する。

「映像身体学」とは、「人間存在における身体性の意味を理論的かつ実践的に追究しながら、機械映像と人間身体の関係を解明し、同時に、両者の新たな関係を創造しようとする新しい人間学である」（『現代心理学研究科の理念・目的』より）。

映像と身体の関係に焦点を合せて「新しい人間学」をめざすという狙いが、この新奇な名称に圧縮されている。だが、1つの学問領域が存在すると言えるためには一般に次のような条件が必要である。問いと答えの具体的な範例となる業績（トーマス・S・クーンが維持したほうの「パラダイム」概念）、研究者やアーティストなどの専門家からなる共同体（通常は学会という形態をとる）、大学や大学院などの教育研究組織（さらにはそこで使用される教科書の類も含めて）、問題は学としての厳密な体系性や整合性ではなく、研究活動を保障する社会的事実である。これら3点のうち、「映像身体学」は教育研究組織だけが先行し、他の2つの要件はいまだに充足していない。つまり「映像身体学」は学としてはまだ存在していない。

本誌がみずから捧げるのは、その来るべき学に対してである。

とはいえ、新たなものが一気に創設されるというような事態は神話でしか起こりえない。新しいものは古いものの姿を借りなければこの世に現われることはできない。哲学者のジル・ドゥルーズがくり返し説いたように、新たな力がある対象を占有しうるのは、その対象をすでに占有している古い力の仮面を被ることによってであり（『ニーチェと哲学』）、物も人もそれらを含んでいなかった総体のなかに出現して排除されずに自己を保持するためには古くから在るものを模倣せざるをえないのだ（『シネマ1＊運動イメージ』）。

「映像身体学」の名を掲げた学科と専攻がすでに確立された多様な学問芸術領域から構成されているように、その学科と専攻の「教育、研究を促進するために」（編集方針より）刊行される本誌も、おのずから既存の個々の分野から出発する。それらの領野を真摯に歩み、かつ果敢に横断するその先に、未知の、ひょっとすると怪物的な何かが生まれ出ることも夢見つつ。

中村秀之（『立教映像身体学研究』第1号編集委員長）